

杜子春

芥川龍之介

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春といって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽して、その日の暮にも困る位、憐な身分になっています。

何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、繁昌を極めた都ですから、往來にはまだしつきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当たっている、油のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗の帽子や、土耳其の女の金の耳環や、白馬に飾った色系の手綱が、絶えず流れて行く容子は、まるで画のような美しさです